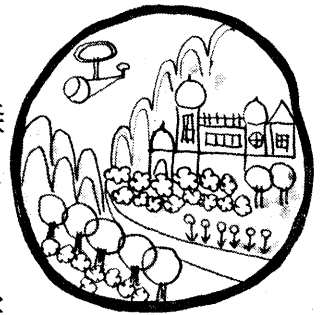


幼児教育の喜びと畏れ^{おそ}

八木重吉の詩から

「このごろの子どもと家庭」という題で、お茶大附属幼稚園PTA主催の講演会で行なわれた私の話の速記が、本誌五月号に出ております。私はその話の最後に、八木重吉の詩を引用し、親があまり子どもに欲ばった期待をしないで、これだけだと、一つか二つ、つよい「願」をもつことが大切だということをのべました。今日は、その詩をあえてまた引用することから始めるとしましょう。

森田宗一



さて

あかんぼはなぜにあんあんあん
なくんだろうか

ほんとにうるせいよ
あんあんあん あんあんあん

うるさかないよ うるさかないよ

よんでるんだよ

かみさまをよんでるんだよ

みんなもよびな

あんなにしつこくよびな



昨年秋私は初孫を得ました。赤ちゃんに学ぶことは非常に多いものです。泣くにも笑うにも、赤ん坊は全力的だし一念をこめています。全身全霊をこめて泣いたり笑ったりしています。それがいいのです。それに對し若い母親が、満面に笑みをうかべ、時には百面相をしながら、「イナイバー」と呼びかけたり、一緒になつて全力で笑い、せい一ばい愛撫し世話をしている姿は、ほんとうに美しいと思います。それはほんとうに大きい喜びです。

八木重吉という人は、三十歳に満たない生涯を純粹に燃焼しくして世を去つたようなクリスチャン詩人でした。愛する若い妻と二人の子を残して早逝しました。英語の教師として貧しい生活をしながら純一無垢なたくさんの美しい詩を書きました。その中には子どもをうたったものがたくさんあります。どれも素朴で純潔で、子どもへの愛に満ちています。

そのいくつかをここに掲げ、最初にあげたものと一緒に味わってみましょう。

赤んぼが わらう

あかんぼが わらう

わたしだって わらう

あかんぼが わらう

息をころせ 息をころせ

赤んぼが空をみる ああ空をみる

みんな寝ている

妻も 桃子も 陽二も

みんなぐったり疲れて寝ている

私はそれを見て 勇気が出た

わが児とすなをもち

砂をくずし 浜にあそぶ

つかれたけど

かなしけれど

うれいなき はつあきのひるさがり

ひかりとあそびたい

わらったり 哭いたり

つきとばしあったりしてあそびたい

うつくしいところがある

恐れなきところがある

とかす力である

そだつるふしきである。

なんといういたずらっ児だ

陽二 おまえは豚のようなやつだ

ときどきうっちゃりたくなる

でも陽二よ

お父さんはおまえのためにいつでも命をな

げだすよ

問題の根は幼時にある

私は二十五年間ばかり家庭裁判所判事として、非行少年とか問題児といわれる少年少女の（診断・治療・教育）仕事をしてまいりました。青少年の問題は社会

の問題で、家庭や学校教育だけの責任でないことは、もちろんです。しかしいつも痛感させられたことは、

幼少時からの教育とか育て方が、非常に大切だということ。十七、八歳にもなった少年（小さいジャンルマン・レディと呼ぶべきかもしれない）の非行その他の問題が、専門的にしらべてみると、幼時のころに根があり、それから発展している場合が多いのです。

たとえばA君のケースがそうです。情緒不安定で、思いつくとカッとなって悪いことをする性癖が目立っておりました。家庭裁判所のケースとなり、調査官や鑑別所の技官が専門的に診断してみると、まず根深い原因は、幼少時の母子関係にあることがわかりました。Aの幼いころ母親は夫（とくにその母親）との間がうまくいかず、いつもイライラしていました。その気持ちのはけ口をたえず幼い子どもに向けていたわけです。母乳も早くとまり、人工栄養でした。子どもが泣いたりさわいだりすると、感情的な態度で接するだけで、余裕とかユーモアがないのです。安定感がない。子どもは親（ことに母親）の気持ちや生活態度をそっくりうつすものです。ほんとうに「子は親の鏡」です。五、

六歳までの間に、A君がどんな性格の子に成長したか、常識でも想像がつくわけですが、専門の診断は、そのことをはっきりえがき出してくれました。

そこでA君の現在の非行に陥りやすい行動の問題を解決し、その健全な更生をはかるためには、どうしても幼少時からの問題をときほぐさなければならぬわけです。これは十八歳にもなった現在では、なかなか困難な日数のかかることです。そこで民間の家庭的な施設の朝昼晩の生活の中で、カウンセリングをし、生活の基本訓練をさせました。もちろん家庭の調整、母親に対するカウンセリングや指導、さらには父母の間柄親子関係の改善にまで手をのばさなければなりませんでした。

いろいろないきさつはありますが、幸にしてどうやら問題の根はなくなり、A君の言動も落ち着き、少なくとも問題行動は、全く影をひそめました。母親も、そうなるから今さらのように、子どもの幼いころのことがどんなにこわいほど大事なものを悟ったのです。

一般に青少年の問題行動があると、その本人が悪い

とか親や社会の現在の問題だけがとやかくいわれます。しかし真の原因や問題解決の鍵は、もっと幼いころの親子関係にある場合が多いものです。

そしてこのことは、母親だけでなく、親に代って養育する人、あるいは保育園、幼稚園の先生にもいえることなのです。そこに根があったという例も少なくありません。子どもは敏感な心をもった生きものです。畏れの心と安定感と静かな愛情をもって子どもに接したいものです。

八木重吉の詩など時々愛唱してみるのには、そのためにも役にたつことだと思ふのです。

(上智大学講師)